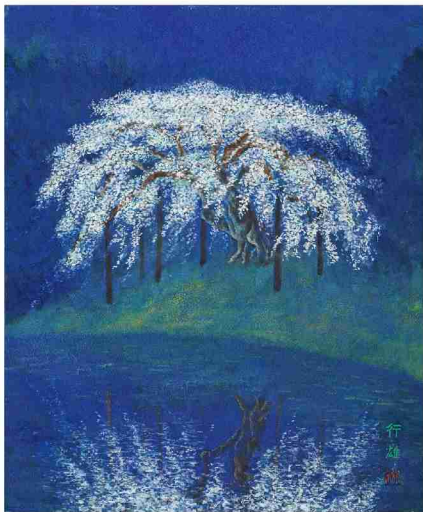


# 游美

- 1 古谷 行雄さんの作品と  
作品についての言葉
- 2 作家探訪 川瀬 伊人先生
- 3 美に遊ぶ
- 4 美術鑑賞旅行
- 5 「辻 水 ふたつの顔を持つ画  
家」展を観て  
ワークショップ
- 6 心に残る私の一点  
あとがき



古谷 行雄「鏡桜」

2020年  
岩絵の具・西の内五介和紙  
F20号

2019年4月朝の新聞を読むと、福島県二本松市の桜の記事が目に入りました。中島の地蔵桜\*という記事でした。夜間はライトアップし木下には水を張った池があるという内容でした。地元の人たちが長年守ってきた桜です。私はすぐに出かけたくなり、その日の午後出かけました。午後5時ごろ桜の所に着いてみると、多くのカメラマンが思い思いの場所で日暮れを待っていました。遠くには山脈があり、少しずつ日が落ち始め夕日が水面に映り込んできました。地元のボランティアの人が色々説明をして下さいました。日が沈み始めると、ライトアップ

された桜と背景の空が白から青く群青色に変化してきました。今までこんなに空を意識して見たことがありませんでした。刻々と変化する桜。今日は風も無く静かな水面に鏡のように桜が映り込んでいました。何と素晴らしい景色なのだろうとカメラのシャッターを切りながら、どう描けばよいのかと少し考えました。午後8時過ぎに人影もまばらになり、自分の目に桜の思いを焼き付けながら帰路につくことにしました。

(小美玉市在住)

\*編者注：「中島の地蔵桜」所在地 福島県二本松市針通字中島46番地



日本画家 よしひと  
川瀬 伊人 先生を訪ねて

## グローバルな 日本画をめざして

今回の探訪は、2008年に制作した作品「愁思の沼」が茨城県近代美術館に収蔵されている日本画家川瀬伊人先生。美術館にてお話を伺った。先生は筑西市で制作活動されている。

先生は幼少の頃より絵を描くことが好きで、漫画、アニメをまねて描いていた。高校で学んだ油絵は性に合わなく感じ、東京藝術大学では日本画を学んだ。大学院生時には中国・敦煌莫高窟壁画の模写を行った。和紙へ墨で下描きをし、それに彩色して現物と全く同じように描いた。模写の勉強をすることで画材の使い方を徹底的に学ぶことができた。並行して大学時代は都会の風景を多く描き、博士課程修了時の作品



「愁思の沼」  
2004年／紙本彩色  
71.5×48cm



「愁思の沼」  
2008年／紙本墨彩／211.5×169.5cm  
茨城県近代美術館蔵

「MADO-風が渡る」はゴッホの作品「カフェテラス」の日本画版を描こうと思い、窓を通して室内から外を眺める風景に見立てた作品をパネル6枚に描いた。この作品が野村賞を受賞し、藝大美術館収蔵となった。

作品を描くときは完成図を事前に予想して、制作手順を計画する。イメージを形にする為に下図をたくさん描く。モチーフは参考にする程度にとどめて実際のモチーフの色や形に拘らずイメージを膨らませていく。

先生は、伝統的な技法を受け継いで、その上で新しい画材や技術を使い、独自の表現方法を用いて日本画を展開している。日本画制作の難しい所は、絵具が濡れている時と乾いた時では色が変化することや墨は一度画面へ置くと消すことが出来ない点をあげる。

作品「愁思の沼」では白く見える部分は絵具の「白色」を使わずに、「和紙の白さ」を残して表現している。墨を塗る場所や白く残す所を事前に計画し、この作品を制作した。褐色に見える色は

金泥を塗り重ねて表現した。

2011年ニューヨークのアートシーンを見に行く機会を得た。日本人特有の思考や文化を海外から眺める良い機会となった。2019年ニューヨークのアートアワードにて「流水」をテーマにした作品群でグランプリを受賞。海外での活動が多くなった。

先生は大河ドラマの仕事にも長年関わっている。「麒麟がくる」では劇中に登場する水墨画を描いた。また毎年東京台東区の神社さん



「クレマチス」  
2012年／紙本彩色  
33.2×24.2cm

に依頼され干支の絵馬の原画を制作している。

先生に好きな画家を尋ねると、「尾形光琳、俵屋宗達、横山操が好き」と言われる。

日本画に新しい風を吹き込まれる先生の更なるご活躍が楽しみである。

### 川瀬 伊人(かわせ よしひと)

- 1973 東京生まれ
- 2006 東京藝術大学大学院美術研究科日本画修士後期課程修了  
彫り制作野村賞受賞 作品が藝大美術館収蔵
- 2006~2009 東京藝術大学日本画研究室助手
- 2012 ART TAIPEI(彩鳳堂フェス)
- 2013~14 川瀬伊人展(東京・日本橋高島屋本店 以降各店舗巡回)
- 2014 一全・組・墨・川瀬伊人展(東京アートフェア・東京美術倶楽部)  
川瀬伊人展(香風画廊 東京・日本橋)

- 2016 一色・墨・雫〜川瀬伊人日本画展(東京・日本橋三越本店)
- 2019 RONIN-GLOBUS ARTIST-IN-RESIDENS PROGRAM AWARD (NYCI WINNER グランプリ受賞)
- 2020 NHK大河ドラマ「麒麟がくる」劇中に登場する水墨画制作や修復への演技指導など

【作品収蔵】 東京藝術大学美術館 台東区 法善寺 平塚市美術館 徳川美術館 赤坂日枝神社  
茨城県近代美術館 将ぞくら美術館 色巻美術館 他

現在 東京・茨城県筑西市「ジ・ヒロサワ・シティ」のスタジオで制作



中山 修治

私は教員の職業生活を続け、退職して10年が経過しようとしています。今も興味関心を強く持ち続けていることの一つに絵画美術があります。そこで過去を振り返りつつ、特に感懐深い作品を現在の思いも入れ鑑賞したいと思います。

私が高校生の頃、図書館で画集を見ることがありました。その中で殊に印象深く感動した絵が川合玉堂の「藤」でした。大胆な太い幹のうねりが快く自由奔放に近い解放感が吹き抜けていくようでした。幹をたどっていくと花の房が繊細に葉群れの中から垂れ下がっています。心のひだに詳細に線刻されていきます。求道の精神が喚起され微細さを突き詰めていこうとする高揚感であります。そして小鳥三羽が躍動感を与えてくれます。どこまでも自由な飛び回れる飛



川合玉堂 「藤」  
1929年 / 紙本淡彩 / 183.5×61.5cm  
岐阜県美術館蔵

翔感を一瞬の把握で止め得て、現実には小鳥は飛んでいけるのでそれを感じることで画面に限りない空間意識を醸成してくれます。

東京の展覧会に行くようになって、幾多の画家や団体の絵画を見ていてその中で心地よさを感じた絵画が奥村土牛の「醜顔」でした。幹の色相が画面の真ん中において、背景の土塀の方からすくっと浮き立ってくる重量感があって、そこに薄い桃色の花群れが覆いかぶさってきて、その中に浸っていたという欲求が生じてくる。画境の中に居住まいを正して悠久の感慨に浸っていたい思いなのである。

画集の中にも傑出した作品を見てその画家に敬服することがありました。それは熊谷守一の「あじさいと鶉」です。あじさいの花が数個の量塊をもって花と思わせるし、その花の塊が葉の塊に調和している。一見してのその簡易さの快感は簡単ではありません。実在の



奥村土牛 「醜顔」  
1972年 / 紙本彩色 / 135.5×115.8cm / 山種美術館蔵

あじさいが心に彷彿とよみがえる。そして心に働きかけ、絵面に結実したあじさいなのである。そしてそのあじさいの前に自由に動き回れる鶉がその動きを一瞬に動きのまま止めているが、その動きが心の中で止まらない。短歌で表現すると次のようである。

あじさいの ひらく花群れ したたりて 鶉右へ 動き行く行く  
私の絵画鑑賞の旅は樹木の枝葉の各所に沢山の絵画を光の点滅として記憶されているようで、その沢山の絵画に感謝する旅であります。  
(常総市在住)



熊谷守一「あじさいと鶉」  
1958年 / 油彩・カンヴァス / 37.9×45.5cm  
天一美術館蔵

### お知らせ

山種美術館で、奥村土牛「醜顔」が展示されます。

【特別展】  
世界遺産登録10周年記念 富士と桜  
—北宮の富士から土牛の桜まで—  
<https://www.yamatane-museum.jp/exh/2023/fuji-sakura.html>

会期：2023年3月11日(土)～  
5月14日(日)

※会期中、一部展示替えあり。

前期：3/11(土)～4/16(日)

後期：4/18(火)～5/14(日)

開館時間：午前10時～午後5時

(入館は午後4時30分まで)

休館日：月曜日【但し、5/1(日)は開館】

入館料：一般1,300円

2022年11月25日、会員30名が栃木県立美術館及び宇都宮美術館を訪れ、名品を堪能しました。

### モネ再発見の旅

阿部 玲子



雲ひとつなく晴れ渡った11月25日、今回は抽選にバスしてバスの旅へ。秋の美術鑑賞旅行「栃木県立美術館と宇都宮美術館」出発。

栃木県立美術館開館50周年記念「印象派との出会い—フランス絵画の100年 ひろしま美術

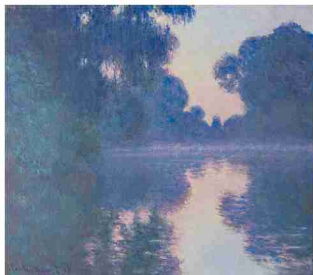
館コレクション」を鑑賞。広島銀行が設立に寄与し、印象派の作品を中心としたひろしま美術館が開館したことをパンフレットで知りました。

照明を抑えた展示室を歩いていると、ある作品から光が射し込んできます。クロード・モネの《セーヌ河の朝》です。油彩なのに写真かと思うほど。朝日が昇る空気感に溢れ、オレンジからピンクへと朝焼けの染まってゆくシーンに立ち会っているようで、しばらく釘づけ。前にもモネ展とかで目にしていたはず。でもこの作品に心奪われたのは初めてです。

他のアーティストではアンリ・ル・シダネルの《離れ屋》。最後の印象派として「シダネルとマルタン展」があったのをスマホで確認。

日本勢では当地でもおなじみの岡鹿之助。色合いが大好きです。広島出身の南薫造の作品も気になるので、これからの楽しみです。

お昼は、豆腐と湯葉料理の「月山」で茶壺弁当。た



クロード・モネ 「セーヌ河の朝」  
1897年/油彩、カンヴァス/82.0×93.5cm/ひろしま美術館蔵

だ県立美術館内の経路が分かりづらく集合が遅れて、ランチ時間がカットされておかみの説明もそこそこに、お料理を夢中で頂く有様。その後出発時間がずれたことで、

普段食することのない大豆ご飯、塩味がきいていておにぎりを持ち帰りたいほど。少しおかわりをして完食。

宇都宮美術館は敷地全体が宇都宮の森として整備され、入場するまで結構歩きました。「これらの時間についての夢」展では、高橋銃の《二羽のウサギ》の映像が印象的。紅葉狩りにベストタイミングで、好天に感謝。

今回特別に栃木県内当日限りのお買物券付で、ろまんちっく村で土産もたっぷり購入。五感からお腹まで超満足した旅でした。友の会のスタッフの皆様、感謝です。  
(水戸市在住)



アンリ・ル・シダネル 「離れ屋」  
1927年/油彩、カンヴァス/150.0×125.0cm  
ひろしま美術館蔵



宇都宮美術館にて

## 「辻永 ふたつの顔を持つ画家」展を観て

島津 利幸

原稿執筆を引き受けたものの筆が進まず、三度展覧会場に足を運びました。洋画家としての辻は郷土作家であり以前から親しみを覚えていた作家です。柔らかな筆遣いと明るい画面で穏やかな日常や風景を描き、観る人にやすらぎを与えてくれる作品が多く、今回の展覧会でも楽しむことができました。

「ふたつの顔を持つ画家」という展覧会タイトルから窺える通り、辻の「裏技」植物画がまとめて展示されて、これほど一度に観る機会はありませんでした。辻の純粋な楽しみ、心の慰めとして描かれたと展示解説にありましたが、細密で繊細な植物画は油彩画にみる筆致とは全く異なり、その卓越した観察眼と描写力に驚かされました。植物の表情、花の色、茎や葉の表現等、植物を本当に愛していたのだろう画家の心情が感じ取れました。過去の図録によると、辻は昼の間に採ってきた花を家族が寝静まった深夜に写生していたとありました。植物に向かうことは作家個人が幼少期から大事にしていた自分だけの時間だったのでしょう。ポストカード「萬花図鑑の世界」を眺めてみるとその秀逸な筆遣いから作家の息づかいが感じられるようでした。

このところ、展覧会に足を運んでも駆け足に作品

を観て、余韻を楽しむほど余裕が無かったのですが、この展覧会は複数回訪問し時間をかけてじっくりと鑑賞する機会を得ました。おかげ様で、丁寧に作品を観ることで、より一層作品の魅力に触れられるとあらためて感じることができました。やはり、美術鑑賞は時間の余裕、心の余裕が大事ですね。

近隣の美術館や画廊には時々足を運びます。茨城県近代美術館は内容の濃い企画展示が多く、毎回楽しみにしています。これからも意欲的な企画を期待しております。  
(水戸市在住)



「うめ いばら科」  
明治41(1908)年1月14日 / 和紙・油彩・墨  
28×20cm / 水戸市立博物館蔵

## ワークショップ

2022年11月20日

## 「植物画講座—植物の魅力を描こう」

四苦八苦の一日

松本 寛子

2022年11月20日(日) 10～15時、「辻永 ふたつの顔を持つ画家」企画展の関連イベントとしてのワークショップが開催されました。今回は初心者向けの講座で、定員は15名。小学2年生からシニアま



講座風景

で幅広い年齢層の参加者でした。

講師は植物画家の石川美枝子先生。植物画の歴史についてのお話の後、用意されたストックをモデルに制作に入りました。スケッチ、トレンシングペーパーでの転写、彩色と手順を踏んだの優しく丁寧なご指導をいただきました。考えていた以上に手強い作業で四苦八苦でしたが、充実した楽しい時間でした。「実物をしっかり観察し、何となくではなく、心に響いたことを大事にして、描きたいと思って描く」ということを肝に銘じたと思います。

(ひたちなか市在住)



講座での筆者の作品

## 小倉遊亀「径」

吉沢 真紀子

子供を連れての美術館は行けないと思っていた子育ての真っ最中の2000年。学校からのチラシに「ふっ」と笑える絵が描かれていました。それが小倉遊亀さんの「径」。「見たい」と思い、子供達と4人で「しーっ」と言いつつ鑑賞というより目に写しただけの絵。親の真似をして成長していくという子の姿が強烈で、自分が正しい手本となるよう生活し、子供達にはそれを見て感じて勉強してもらわなければと心に誓った作品です。実際はどうだったのか。

つい最近また目にした作品に、今までは「微笑ましい」「頑張ってる」と応援するおばあちゃん目線になりました。そしてやはり「ふふっ」と笑顔になれる癒しの1枚です。ただし、子供の後をゆっくりと見失わないように叱られないよう緊張してついていく年になったことも事実。どちらにしても前を向き真似してついて行くことには変わりありません。自分自身を見直す年となり、子供にとってはどんな親であったか、子供達はどんな親になるのか。楽しみであり心配でもあります。

何が何だかわからず、心には余裕などなく懸命に生活していたら当時、心を軽くしてくれたと同時に目を覚まし考える機会を与えてくれた叱咤激励作品です。

子育ても一段落したとたん、介護が始まり時間に

余裕がなくなりました。美術館のポスターを目にしてもそのうちに行けるだろうと我慢。しかし時間を作り、通り道だから1時間だけ好きな絵を鑑賞ではなく、心を無にする場として美術館を利用することとしました。ある時、気分良く帰路に就く途中、目にしたのが懐かしの「径」が入ったポスター。思わず笑みがこぼれ思い出が蘇りました。

いつもは風景画の大好きな私が何気なく目にした絵画の思い出です。  
(水戸市在住)



小倉遊亀「径」  
1966年、板彩色(ホモゲンホルツ) / 165.7×211.1cm  
再興第51回院展出品 / 東京藝術大学蔵  
画像提供: 東京藝術大学 DNPatcom

## あとがき

○相変わらずのコロナである。しかしそれを世の中の停滞の言い訳に使わなくなった事に、わずかな開放感を覚える。友の会の企画も再起動のボタンを押した。恐れつつ楽しみつつ、また会員の皆様の笑顔の集える場を多く持つよう期待したい。

○本号では、画像の掲載及びアータの貸与に関して下記の各氏から許可をいただきました。厚くお礼申し上げます。

- ・川瀬伊人「慈悲の沼」の掲載許可を、当美術館 山口 和子 氏
- ・川合玉堂「藤」の画像掲載許可及び画像アータの貸与を、岐阜県美術館 森竹 舞 氏

- ・奥村土牛「醜顔」の画像掲載許可及び画像アータの貸与を、山種美術館 上野 晃子 氏及び吉田 業由 氏
- ・熊谷守一「あじさいと鶏」の画像掲載許可を天一美術館理事長 矢吹 隆一 氏、画像アータの貸与を天一美術館 斉藤 隆 氏、諸ご教示を天一美術文化財団 菊池 優子 氏、及び著作権利用許可を東京美術倶楽部著作権委員会 北條 朋子 氏
- ・クロード・モネ「セーヌ河の朝」及びアンリ・ル・シダネル「離れ屋」の画像掲載許可及び画像アータの貸与を、ひろしま美術館 農澤 氏
- ・小倉遊亀「径」の画像掲載許可を有限会社 鉄樹 代表取締役 小倉 健一 氏、画像アータの貸与を、株式会

社DNPアートコミュニケーションズ 松橋 栄美 氏

- ・辻水「うめ」の画像掲載許可及び画像アータの貸与を、水戸市立博物館 中村 有紀子 氏

以上の方々にな重てお礼申し上げます。

茨城県近代美術館 友の会会報

## 游美 No.102

発行 2023(令和5)年3月  
編集・発行 茨城県近代美術館友の会  
〒310-0851  
水戸市千波町東久保 666-1  
TEL.029-243-5111  
E-mail : fmomaibk@gmail.com  
HP : https://www.fmoma.com/

印刷 株式会社 光和印刷